

1. 背景とねらい

本県における本年の水稻作柄は、登熟後半の好天により作況指数「101」(岩手統計情報事務所10月15日現在)と平年並みとなり、品質は1等米比率が91.6%(盛岡食糧事務所 12月20日現在)と過去最高を記録し、特に「ひとめぼれ」、「あきたこまち」は95%以上の高率となった。

そのなかにあつて、県中南部を中心に作付けされている本県のオリジナル品種「ゆめさんさ」は腹白、乳白(心白)を中心とした白未熟粒と青未熟粒の混入及び茶米等を理由にした落等により、他品種より1等米比率がやや低かつた。

そこで、「ゆめさんさ」について本年の生育・登熟経過及び玄米品質の特徴を検討したところ、今後の品質向上対策に活かすべき知見が得られたので、指導上の参考に供する。

2. 技術内容

(1) 平成8年産「ゆめさんさ」の特徴

ア 玄米千粒重と心白粒の発生割合

本年産米の特徴として玄米千粒重が過去に比べて重くなつたことがあげられる。玄米千粒重が重いほど心白の発生割合が高まる。この傾向は過去の結果(平成6年度指導上の参考事項、水稻品種「ゆめさんさ」の栽培法)とも一致する。ただし、今年は心白の発生割合はあまり高くなかつた。

イ 単位面積当たり籾数と玄米千粒重の関係

単位面積当たり籾数が少ないほど玄米千粒重が重くなつた。

ウ 出穂後20日間の気温と千粒重の変化・心白の発生割合

出穂後20日間の平均気温が高いほど玄米千粒重が重くなる傾向が示された。また、心白の発生割合も同様の傾向を示した。

エ 登熟積算気温と玄米品質の変化

登熟積算気温 800°C以上では粒厚分布の変化は少ない。また、登熟積算気温の増加と心白粒発生割合は明瞭な関係が認められなかつた。

(2) 品質向上のための対策

ア 適正籾数の確保

単位面積当たり籾数が不足すると玄米千粒重が増加する。また、玄米千粒重の増加により心白の発生割合が高まる。そこで、乳白・心白を増加させないためには生育診断基準の適正範囲内で穂数・籾数を確保する必要がある(㎡穂数510~550本㎡、籾数30~33千粒)。栽植密度(20.0株/㎡以上)を確保し、施肥は基肥中心とし(「あきたこまち」よりN1kg/10a程度の増)、追肥の重点時期は幼穂形成期とする(通常の生育ではN2kg/10a)ことが大切

である（平成6年度指導上の参考事項、水稻品種「ゆめさんさ」の栽培法）。

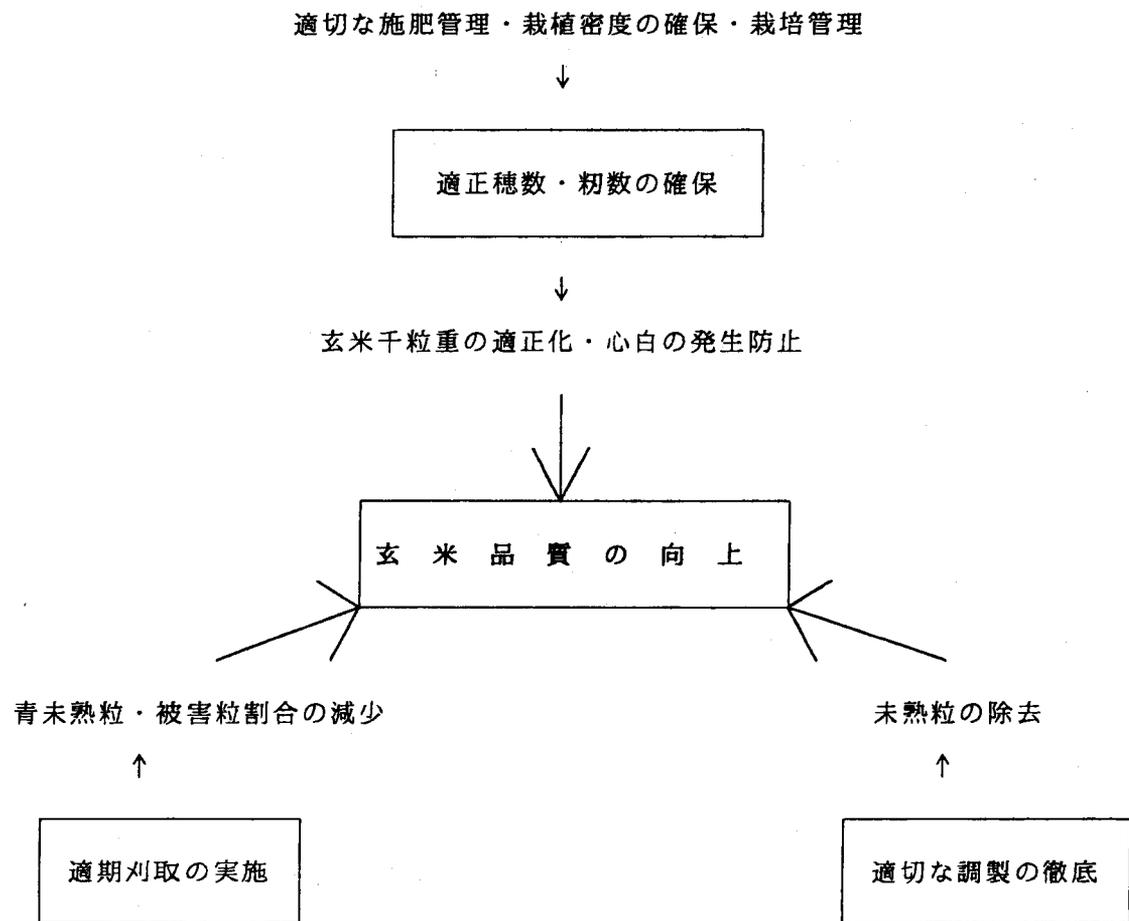
今年度は5月上～中旬の低温により初期の莖数不足が穂数不足に影響する事例もあった。そこで、低温期には天候が回復するまで移植を延期し、活着促進を図ることも大切である。

イ 適期刈取の実施

出穂後の登熟積算気温が増加すると青未熟粒割合は減少する。また、登熟積算気温が増加すると着色等の被害粒発生割合は増加する。そこで、未熟粒の割合を減らし、品質の向上を図るため刈取り適期（出穂後の登熟積算気温900～1050℃を目安とし、実際の登熟状況も観察する）を実施する。

ウ 適切な調製の徹底

本年の場合は、粒厚の厚い未熟粒も発生した。そのため1.7mm篩では未熟粒の除去が不十分となり、整粒を確保できず落等する事例もみられた。1.9mm篩の使用を徹底することにより未熟粒を除去する。



3 指導上の留意事項

- (1) 心白の発生は標高とも関係があるので、栽培適地（メッシュ気象図の好適地区分の120～200m、沿岸部は100～200m）を守ること。
- (2) 登熟積算気温はあくまで目安なので、実際の登熟状況を確認してから刈取りを行うこと。